



作業を「見える化」にした農福連携で地域に貢献 農業生産法人 株式会社CoCoRoファーム(西都市)



① 農福連携のきっかけ

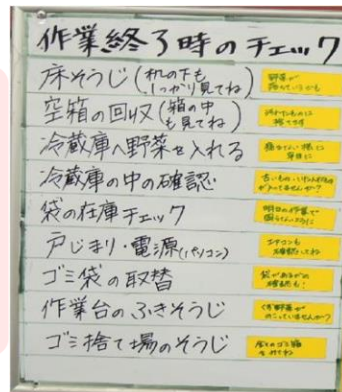
●代表の堀川佳恵さんは、教師を経て、福祉施設を設立。
障がい者が熱心に取り組める効果的な作業として、以前から関心があった農業に目を向け、平成24年に「農業生産法人株式会社CoCoRoファーム」を設立。

② 一年目のハプニング

●雑草を抜く作業をお願いした。
→畝に植えてあった野菜の苗まで全部抜いてしまった。
●ミニトマトの収穫をお願いした。
→コンテナの半分に赤いミニトマト、半分に青いミニトマトを取ってきた。

③ 解決のポイント☆

●作業内容をわかりやすく説明。
→「除草して」とか「収穫して」ではなく、具体的な作業内容を細かく指示する。
●作業内容の「見える化」。
→出荷作業は日によって変化があるので、指示ボードに写真貼付して表示。



作業手順掲示物

④ 成果

●利用者が達成感を得て、自ら進んで働ける環境ができた。
●自ら進んで農場に行くようになった。
●個々の得意な部分を伸ばせるようになった。
●コツコツと作業が出来るようになった。
●作業で自信が付き、一般就労として会社等に就職できた。

ノウフクJASの取得

●ノウフクJASの研修を受け、宮崎県で初の取得を目指した結果、令和元年12月、九州初の取得(全国で7番目)。
●ノウフク・アワード2024 グランプリ受賞



日本基金
ノウフクとは、障害者が農林水産業に就労し、農林水産物の生産工程に携わる取り組みの事です。



ノウフク・アワード2024グランプリ
受賞の発表をする堀川代表

農福連携の秘訣

●農福連携を行うには、雇用者は「賃金で雇っている」ではなく、「手伝ってもらう」という考え方。働く側も「賃金をもらっている」ではなく「仕事をさせてもらっている」という考え方が重要である。

経営の状況

●利用者22名、スタッフ8名。
●水稲15ha(コシヒカリ7ha,ヒノヒカリ8ha)2年前の約4倍増、施設50aにズッキーニ、ミニトマト等、露地20aにサツマイモ。
●取引先は、飲食店、スーパー及び直売所等。
●自社作物だけでは商品が不足するので、卸売り免許を取得し、市場及び農家(ブロッコリー、ネギ、キャベツ等)から仕入れをして取引先に提供している。

今後の展望

●近隣集落では、高齢のため作付け出来ない水田貸与希望者が多く、可能な範囲で更に作付けを増やし、荒廃地解消に繋げたい。
●当社は、西都・児湯地区農福連携地域協議会の事務局を担っており、今まで以上に地域に根差した農福連携に貢献したい。

